

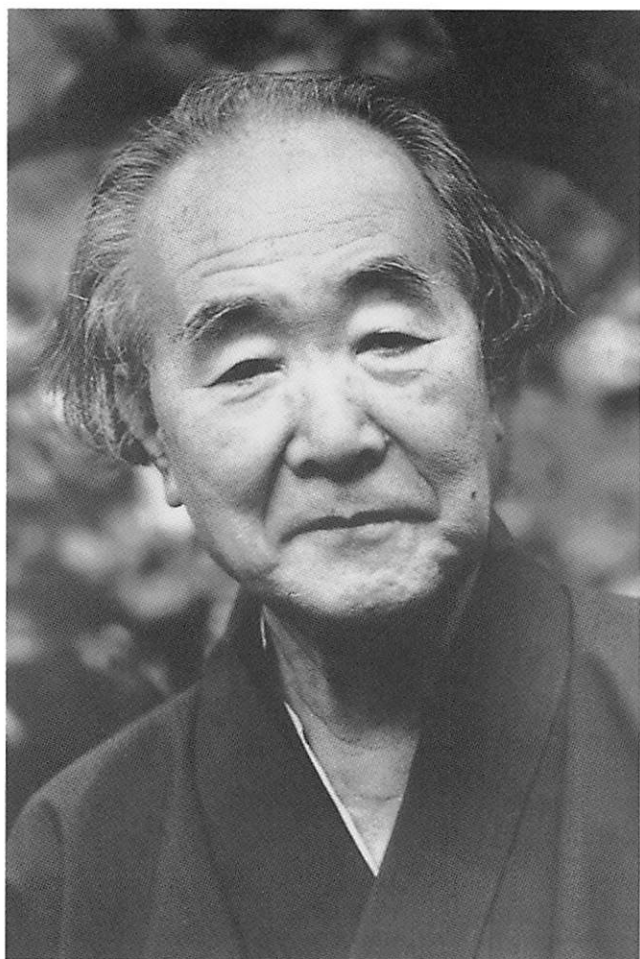
新

歌人群像

中野菊夫

● 永遠のオルガナイザー

● 大林明彦 ●



● 歌中に絵あり

「若い頃の中野君は颯爽さつそうとしていて風格があったな」と、近藤芳美よしみは追悼の辞で発言された。たしかに、中野菊夫は長身で、髪を長くうしろに垂らし、格好良かった。私が樹木社に入会したのは一九七〇年、中野菊夫五十九歳の時である。なにかしら由井正雪せいせつを思わせる風貌ふうぼうであった。

中野菊夫は一九一一（明治四十四）年十一月三日、東京市渋谷町長谷戸（現在の渋谷区恵比寿）に生まれた。父（東京外国語学校ロシア語科に学んだ）は園芸業で、「シブヤガーデン」を経営していた。そのためもあってか、草花の名には詳しかった。また、母が正岡子規の妹と学校が一緒だったとかで、病床の子規の話もよくされていた。

学歴としては、荏原第一小学校から国士館中学校に進学。そこで啄木歌集を耽読たんてき、作歌を開始する。学長（下位春吉しもいはるさち）の家で文学の講義も受けた。佐藤文男、冷水茂太、山岸はじめなどが歌友だった。その後、多摩美術学校（現在の多摩美術大学）の図案科を卒業。カーペットデザイナーとして働く。日本画を平福百穂ひらふくひゃくすいに、また洋画を岡田三郎助さぶろうすけに習っ

家族といっしょに。左から、中野菊夫（長男）、母、妹、弟（次男）、弟（三男）、父（1939年）



た。この画家としての眼が、中野菊夫の短歌の奥に常に秘められている。第七歌集『鷹とリス』から三首引用しよう。

ひやしたる葡萄一房をとりいだし夜深
き卓に眺めつつ食ふ

雪かづくヒマラヤの山透きてみゆ藻の
かたなびく湖の向うに

夏のさくら雨にぬれつつ少しやさし
だるる枝をくぐりたりけり

菊夫の短歌は現実の絵である、と言ってよ

いくらい、歌中に絵あり、という趣である。

この『鷹とリス』は作者が最も好み、また最も得意とする歌集であった。日常のありふれた事象を潔癖なタッチ、すなわち平明な言葉で素朴に美しく、かつ明朗快活に表現していくのが、その作家としての基本の姿勢であった。

第一作にその作家の本質があるとはよく言われることではあるが、中野の場合もその例外ではない。第一歌集『丹青』にそれは露骨である。土井信良（当時、宮内省図書寮）の正鵠を射た評がある。「収むる歌のなかには高い詩を持ちながらも、表現不足のため平板調に陥入つてゐるもの無きにしも非ずである」「中野菊夫と歌、これは恐らく一生涯不可分の存在であり、それは生活と詩といふ立場に於て、はた又戦争と歌といふ現実に対して、彼の創作は精進されるであらう」。

心友の忌憚ない批評であり予見である。また、「彼には直接歌の師はなかつたと言つてよい」とも言っている。そのことは中野菊夫も度々言われたが、自己本位（夏目漱石の言、自己権力（吉本隆明の言）に根ざしていたということだろう。それゆえに、よくケンカ（離別と拒否）もされていた。しかし、師無きがゆえの限界と栄光も、一生付き纏つたとも思う。

家族と戦争と

「生活と詩」とは何か。生活の中に詩を発見し歌うことと考えてみよう。それを意識するしないにかかわらず、「家族」をテーマにしたことは確実である。それへの愛が最初から最後まで貫かれている。

わが授業終へてかへれば幼子は風に向
ひて馳けくるよただに

『幼子』

傘もたず買ひものをしに妻ゆきて雨ふ
りくれば戸をあけておく

『壁』

手に握り銀の小匙を二つもつ共に老い
たる妻の土産と

『陶の鈴』

愛娘と愛妻への愛情の詩であるが、祖父、父、長男への愛も歌われている。「家族」は重要な一つのモチーフだった。もともと中野英夫は文学的なモチーフがない、と言って大野誠夫とともに中野菊夫をも批判していた。中野の批判は、モチーフもさることながら、文体の平板さ（土井信良の指摘）にあったと今では思う。実に常套語を使うのが好きであったと言っている。それはまた虚飾・誇飾を否む姿勢でもあった。

中野菊夫



歌会のパーティーで (1985年)

またもう一つのテーマは、「戦争と歌」というものである。時代と文学と言ってもいいだろう。それは第一歌集以来、変わることなく作者が継続追求したものである。

宣戦を布告すたちまち海遠きハワイ空
襲の戦果まちに拡がる

『丹書』

焼原に一筋のこる道ありて歩めば水の
ながるるひびき

『噴煙』

細き道に兵とゆき逢ひためらひて道ゆ
づりたるが記憶にのこる

『壁』

北鮮へかへる君らが苦しみし日本の町
に柳をうゑぬ

『前夜』

爆撃の進発の基地となり果てし君らす
む沖繩をつねに見守る

『集団』

「文学はドキュメントです」とカフカは言っているが、まさにこれらの歌は昭和史の記録となっている。時代を凝視し、真摯に思考し、短歌化することによって歴史に自己の足跡を残そうと意志している。作の巧拙ではなく、自分が生きて感受した時代の証としての短歌である。

開戦と敗戦（焼原）が歌われ、帰還兵と朝鮮半島へ帰る友が歌われ、ベトナム戦争が歌われている。これらはすべて今日的な問題を孕んでいて、今なお歴史的現在の時点から問い直されつつづけている事柄である。

事件の羅列という批判はあろうけれども、昭和史の一端が垣間見えることはたしかである。なぜ、そのような素材を選んだのかということになれば、作者自ら次のように書いている。

「素材そのものによっても、みずからを表現することが出来るということ、そうした方法による制作結晶態度があると思う」（『私の短歌作法』）

行動の詩の人

一九四一（昭和十六）年、石川妙子と結婚。母校国士館中学校の図画教師となり、足かけ

十年ほど勤める。その間、五十嵐力に歌謡を学び、佐伯好郎に景教を直接学んだ。また歌誌「八束穂」「人民短歌」「明日」「新日光」「農民短歌」などにかかわり、一九四六年十二月には「新歌人集団」を加藤克巳、近藤芳美、宮修二、山本友一、大野誠夫、山田あきなどと結成。盛んに歌作し、評論を書いた。

一九五一（昭和二十六）年五月、歌誌「樹木」創刊。編集主宰となる。この頃の作品群は第六歌集『風の日に』に収められている。

屋上より発車の電車風の日の夕日のなかにゆらぎつつ出づ

死にし子をみづから土に葬りて引きあげし君とも今日めぐり逢ふ

野の中のひらたき石にきて坐る記憶のその遠きまぼろし

一九五三（昭和二十八）年九月、「現代短歌集団」発足に力をかす。岡井隆、吉田漱、篠弘、来嶋靖生、水野昌雄など現在の歌壇を代表する面々の集まりで、この頃から中野菊夫はオルガナイザーとしての器量を本格的に発揮し始める。

またハンセン病を病む人を応援し、助命嘆願をしたり、その患者を見舞ったりして、年

刊療養歌集『試歩路』や、全国国立療養所ハ
ンセン氏病患者協議会の歌集『陸の中の島』
を選歌編集、出版の労も取っている。さらに
『原爆歌集』などの編集もした。

これらのことから、中野菊夫が、弱き者、
病める者、打ちひしがれた者を、精神的に助
けようとしたことはたしかである。名譽欲と
か偽善的な優しさなどでは決してなく、己が
使命として果たしていたと覚しい。それは非
常に尊い、高貴な魂から出た行動だと言っ
ていいのではないか。

中野菊夫はそういう行動の詩を生産する男



奈良・飛鳥で（1983年）

だったのだと私は思う。苦しく病み、ずたず
たに傷ついている心を持つている人にとつて、
自分の歌が載っている歌集を読むことがどん
なに嬉しいことか、想像に難くない。それら
の人々の笑顔をみるのが中野の無上の喜び
でもあったろう。

中野菊夫は沖繩は屋我地やがちにある愛楽園や、
瀬戸内海は長島にある愛生園を生涯を通して
何度も訪れて、それを歌に詠んでいる。

癩園に茅花ほほけてそよぐさま淡々と

した一つの現実

『壁』

近よれば君はすきりてものを云ふああ
癩園なるよ君もその一人にて

占領軍一隊がきてのぞきゆく君らと歌
を語りあるとき

黄色の扇一本を土産とし君に逢はむと
す晩春の午後

『風の日』

若葉より若葉におちて音もなく午後よ
りきたるライ園の雨

手を引かれ入り来し一人座につけば首
ひし横顔を光に向くる

その極みは無実で処刑された「藤本松夫君
刑に死す」と題された一連である。

ライのための偏見に君刑に死す再審請
求中助命嘆願中

『集団』

再審を三たびしてやうやくアリバイに
たどりつきしとき処刑終る

しづかな最後でしたとぬけぬけと言へ
る言葉もつたへられ来ぬ

代筆の遺書手より手にわたりきて君が
自書せる署名一行

法の権力と闘った記録であり、悲痛な挽歌
である。中野の人間性が露あらわに出ている。

一九五六（昭和三十一年）年、現代歌人協会
創立発起人となる。以後、長く現代歌人協会
の理事として会員の増員を図るなど貢献した。
現在の理事長、篠弘は中野を追悼して言う、
「面倒見のいい明るい豊かな人格の人だった」
と。

二〇〇一（平成十三年）年十月十日、九十歳
を目前にして中野菊夫は永遠に目を閉じた。

「樹木」は私一代かぎり——その先生の言葉
どおり、「樹木」は終焉しゆうえんした。が、弟子達は
先生の歌への志を継ぎ、「新樹」（大塚善子ら）
と「丹青」（遠役らく子ら）という二つの歌
誌を誕生させた。中野菊夫は死してなおオル
ガナイザーだったのである。

おおばやし・あきひこ（「新樹」「丹青」同人）